新指定の文化財

「吉村虎太郎の襯衣（肌襦袢）」をめぐって〈その2〉

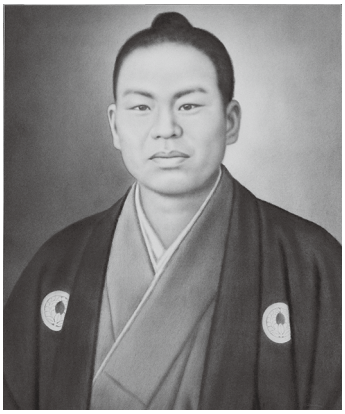
肌襦袢が残された経緯など

（連載全6回）

1．肌襦袢が残された経緯

文久3年（1863）に勃発した天誅組の変で総裁を務めた吉村虎太郎は、8月26日（旧暦）に高取城に夜襲を掛けようとしました。22時頃、薩摩村（高取町）木の辻まで来たとき、警戒に当たっていた高取藩の浦野七兵衛と出くわします。吉村は浦野と鑓で渡り合い、後方では十津川郷士が猟銃で浦野に狙いを定めます。ところが狙いがはずれ、弾は吉村に命中してしまいます。

肌襦袢は、その銃創の手当のために重阪村（御所市大字重阪）の庄屋、西尾清右衛門宅に立ち寄った際に西尾家に残されたものと伝えられます。



吉村虎太郎　肖像画
（津野町教育委員会提供）

2．吉村虎太郎とは

土佐国高岡郡芳生野村（高知県高岡郡津野町）の庄屋の家に生まれました。諱（生前の本名）は重郷、通称虎太郎と称しました。

12歳で父を亡くし、後を継いで各地の庄屋を歴任、農業復興の指導にあたりました。

その頃から国学を学び尊皇攘夷思想を持つに至ります。

尊皇攘夷思想とは、「天皇」を敬うと共に、「攘夷」つまり、外敵（外国の侵略）を撃退しようとする思想です。幕末の日本では、外国船が頻繁に日本近海に現れるようになり、江戸幕府に対して鎖国をやめ、開国することを要求しました。

さて、吉村は、文久2年（1862）3月に土佐藩を脱藩（土佐藩では初の脱藩者）して京都に上がりますが、寺田屋事件（薩摩藩志士粛清事件）に連座したとして捕らえられ、送還されます。

しかし翌、文久3年（1863）2月に赦されて再び脱藩して上京すると、後に天誅組の主将となる公卿の中山忠光らと図り、天誅組の結成に尽力しました。

3．天誅組の変とは

文久3年（1863）8月17日の五條代官所討ち入りを皮切りに、およそ40日間にわたって大和南部の山間部を中心に繰り広げられた尊王攘夷派による事変のことをいいます。

孝明天皇の大和行幸が発表されたことを受け、天誅組は先乗りしておいて天皇をお迎えした後、御親征（天皇自らが征戦を行うこと）により幕府に攘夷を迫る、として皇軍御先鋒出陣と称しました。しかしこの行幸は「八月十八日の政変」により突如中止となり、天誅組は一転、逆賊となってしまうことになります。

さて、吉村は天誅組で藤本鉄石、松本奎堂とともに総裁を務めました。藤本、松本は本隊の中山を補佐しましたが、吉村は後続隊を率いて常に最前線に立って奮戦しました。

しかし9月14日に天ノ川辻本陣が陥落したのに続き、退却先の上野地村（共に十津川村）では朝廷からの沙汰書に従い十津川郷士が離脱すると、もはや天誅組は組織立った戦闘は不可能となり、専ら逃避行となってしまいます。

そしてついに鷲家付近（東吉野村）にてそれぞれの死地に入ることになります。9月24日夜、本隊では精鋭を選び、鷲家口村駐屯の彦根藩の陣中突破を試みました。主将中山の脱出という目的こそ果たしたものの、加担した隊士は囮になるなどして、ほぼ全員が壮絶な最期を遂げます。

また、これとは別行動をしていた三総裁をはじめ他の隊士も、翌日から本格化した山狩りなどにより次々と討ち死するか、もしくは捕縛されました。

吉村は27日未明、鷲家村柿平の小屋で潜んでいたところを注進され、津藩兵に銃撃され戦死しました。享年27歳。首級は京都に運ばれ10月には粟田口で晒されましたが、明治24年（1891）には勤王の志士として正四位を贈位されています。

天誅組は壊滅しましたが、仮に、公武合体派（尊王攘夷派とは対立し、朝廷と幕府の合体による緩やかな改革を目指す）が京都御所で起こした「八月十八日の政変」が不首尾に終わり、孝明天皇の大和行幸が予定どおりに行われていたとするならば、天誅組の運命も大きく異なるものになっていたに相違ありません。

その後、天誅組に倣って代官所を襲撃する事件が立て続けに3件も起こります。尊王攘夷派は再び台頭し、天誅組の挙兵からわずか5年足らずで倒幕は成ったのです。天誅組の変をして「維新の魁」と称される所以です。

【参考文献】
舟久保 藍『実録　天誅組の変』、2013年、淡交社

■問い合わせ先
文化財課　☎60・1608